

高田さんの後ろに、江(たくみ)さんの家があった。

工さんの家に、工 清定さんと、雛様と呼んだ可愛い先生がいた。

工さんは先生夫婦であり、詩人でもあった、当時福島の人たちはあまり関心が無かったようだが、後に清定さんの詩を読む機会があり、やや左翼的な詩集に感激した。また校歌を何篇か残されているのを見て感心した。

又、工さんの家は、多く、兵隊を出された家でもあった。

明治、大正時代は、長男であれば兵役を逃れることが出来たそうで、要領の良い家庭では戸籍上、養子縁組をし兵役を逃れた言われたなかで、多く兵隊に徴用されたことは真面目な家風であったのだろう。

また、後ろの明福さんは「きびやま」の屋号で呼ばれ、馬車での運送業であった。

言い忘れたが、高田さんのお相撲さんも馬車運送で、吉原釜屋で獲れた「春鯖」が、高田酒店の前に集荷され馬車で運ばれる時期は美しい季節であった。

現在の県道は、記憶では昭和九年頃、小松への水道供給の管が、濠の大田山の水源池から通水された時期で、狭い県道もやとと整理され、側溝なども少しずつ整理された時でもあった。

それまでは馬車が、のんびりと通り、またのんびりと馬が道路の真ん中で、長々と小便していたし、学校帰りの子供たちが、空の馬車に乗せてもらい、後ろに足をぶらぶらさせながら帰って来たりした。

岡田さんの家に「産婆さん」が居た。後の収入役をした、岡田さんの母親である。

私の子供、男、三人共、岡田産婆さんにとりあげてもらった、三男は岡田産婆さんの、最後にとりあげて貰った子供だと妻が言う。

小西さんは「松の湯」という銭湯であった。

松の湯の記憶は、「ちよろまつ」と呼んだ、焼き物売りの店を開いた場所であった。「ちよろまつ」は、丁度夕飯ごろ売り物のちゃん鉢を叩いて「天下のちよろまつが来たぞ」と付近を触れ歩くと、子供の私は夕飯どころの騒ぎではない。

彼の手品を見たいからである、子供たちが集まると、売り物の茶碗を五個並べて、中に紙を丸めて入れる、「鼻の脂をちよつと付けて」など笑わせながら、茶碗を、あつちこつち、順番を換える。

「あら、ねえちゃん 見えるぞ」など注意を逸らす、その時代は誰も下着を穿いていない。

絶対に当たった事の無い手品であった。当時は、法事などの予定のある家庭では、皿とか、ちゃんばちを買い求める。後で調べると、一級品で「へこ」になっていたり、絵柄が狂っていたりしていた。

また、藁屋根を葺き替えがあると風呂札が出て、湯は真つ黒だった。

「早く、行かんと、どぶぞ、になるぞ」と急かされたりした。